

大杉谷国有林からの手紙

27通目～29年度のシカ被害対策を振り返って(1)～

立春となり、「うぐいす鳴く」、「魚 氷をいする」と暦のうえでは、すっかり春ですが、外は、今日も寒波襲来です。

さて、今回の手紙では、2月2日開催の検討委員会において、審議されたニホンジカの生息状況調査の結果とシカ捕獲事業の結果を中心に、今年度のニホンジカ被害対策の実施結果をご紹介します。



大杉谷国有林におけるニホンジカ森林被害対策指針実施検討委員会

この検討委員会は、大杉谷国有林において、ニホンジカによる森林被害対策を進めるためには、専門家の皆様のご意見を踏まえた効果的な取組が必要であることから、平成25年度に設置され、その後、毎年2回程度開催され、今回で10回目となりました。

それでは、今年度のシカ被害対策の実施結果ですが、まず始めに、ニホンジカの生息状況調査の結果を紹介します。

この調査は、森林被害対策に必要なニホンジカの生息状況について、モニタリング調査を実施し、森林被害対策を計画的に実行するために必要な情報を収集しています。

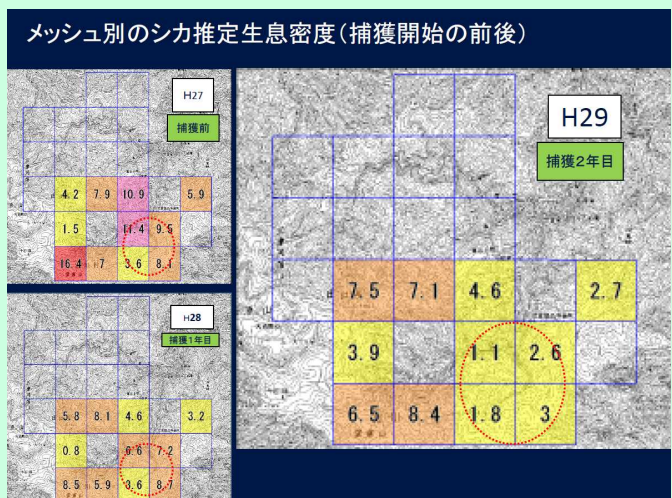
調査項目には、糞塊密度調査とGPSテレメトリー調査の2つの調査があります。

糞塊密度調査は、シカの生息密度指標として、有効な調査方法で、大杉谷国有林では、平成20年度から継続して調査を実施しています。

平成26年以降は、一部表土の流出が見られるなど早急な森林植生の回復が求められている地池林道周辺地域に重点を置いた調査を行っています。

今年度は、平成26年度から継続調査と同一ルートを同一時期であるの11月4日から5日にかけて実施しました。

推定生息密度が高くなるに従い、黄色、橙色、桃色、赤色となっていきますが、捕獲を始める平成27年度までは、だんだんと色が濃くなるとともに、桃色や赤色の箇所が広がっていました。



このため、地池林道周辺地域を重点捕獲区域として、28年度に45頭、29年度に50頭の捕獲を実施しました。その結果、29年度調査では、1.1、2.6、1.8、3といずれも低い推定生息密度となったことから、捕獲の効果が現れていると考えています。

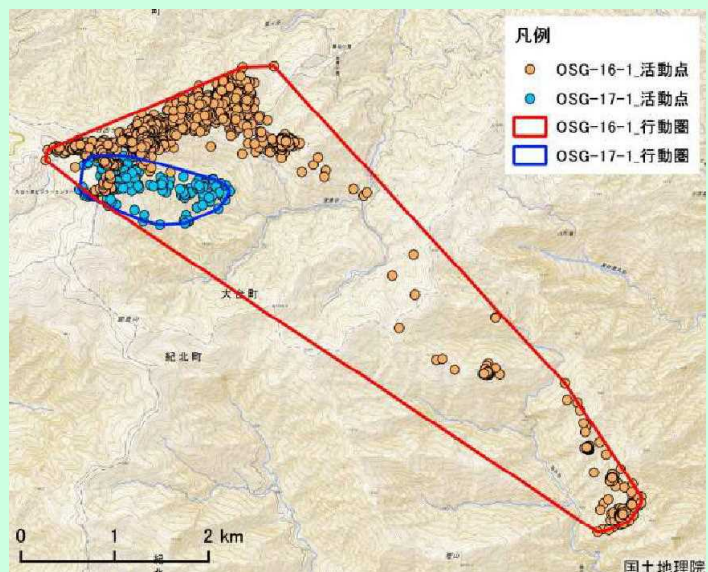
次にGPSテレメトリー調査です。

大杉谷国有林においては、これまで大台林道周辺で9頭、山頂部周辺の高標高域で1頭にGPSを装着して、その行動特性を把握してきました。

しかしながら、高標高域での行動特性調査は1頭に留まっているため、今年度もGPS調査を継続し、高標高域に生息するシカの行動圏、移動経路の把握を行いました。

まずは、新規GPS首輪の装着及びデータの収集結果です。7月18日に誘引地点を選定し、誘引作業を始めました。

9月30日に、正木嶺から日出ヶ岳の間でメスの成獣と行動を共にしていたオスの亜成獣1個体を麻酔銃で捕獲し、イリジウムタイプのGPSを装着しました。青の点が、秋から冬の移動データで、追跡期間が約3ヶ月なので、現時点では、まだ狭い行動範囲となっています。しかし、この個体は、オスの亜成獣であることから、来年度にはメスの成獣と離れる分散行動が見られることが予想され、今後、大きく移動する可能性が高いと考えています。



活動地点分布及び最外郭法による行動圏

次に、昨年度にGPS首輪を装着した個体のデータの収集結果です。この個体は、28年8月に日出ヶ岳山頂付近でGPSを装着したもので、死亡したと推定される4月までの約7.5ヶ月間のデータを収集し、行動特性を分析しました。(赤色部分が行動圏)

その結果、1月に日出ヶ岳周辺から紀北町の銚子川流域の岩井谷国有林付近まで大きく移動し、2月までそこに留まり、3月には再び日出ヶ岳周辺まで戻っていることがわかりました。更に詳しく見ると、岩井谷を利用している期間は4つに分けられ、岩井谷を利用していない期間はテンネンコウシ高周辺まで戻る行動を示していました。また、その移動経路は、概ね決まっており、堂倉谷及び地池谷の合流地点を使っていました。

このように今回の調査で明らかになったことも多く、今後とも、シカの生息状況や行動特性の把握を行い、効果的な森林被害対策を着実に実行していきたいと考えています。

なお、当初予定していた捕獲事業の結果紹介については、紙面の都合により、急遽、次回の手紙(2月23日発行予定)での紹介とします。皆様のご期待に添えるよう、頑張りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

(発行:三重森林管理署 尾鷲森林事務所 地域統括森林官)